

地域主体による国際展の企画運営とアート計画

福島現代美術ビエンナーレ 2006 における企画運営と展示・アート計画について

会津大学短期大学部

産業情報学科

柴崎 恭秀

地域主体による国際展の企画運営とアート計画

福島現代美術ビエンナーレ 2006 における企画運営と展示・アート計画について

柴崎 恭秀

平成 18 年 12 月 15 日受付

【要旨】2004 年にはじめて開催された「福島現代美術ビエンナーレ」は、当初、福島大学絵画教室が主体となって卒業生、在校生を中心に福島県の現代美術を地域に紹介する目的で開催された。当時は絵画教室が中心であったため、作品の多くは平面で、油彩画、日本画、写真作品が中心であった。それから 2 年が経ち、展覧会の拡張と出展作家の充実を図るため、2006 年に行われたビエンナーレでは昨年から実行委員会をスタートさせ、美術館・博物館学芸員や美術家、建築家などの専門家による理事会を発足させ、地域が主体となって行われる展覧会の企画運営の可能性を探った。自主的な企画運営による国際展の可能性と地域の人々が積極的に関われる展覧会のあり方を模索した結果、2006 年の秋、2 週間の期間で開催された「福島現代美術ビエンナーレ 2006」は 150 人を超える国内外のアーティストを動員し、見応えのあるアート展を行うに至った。

筆者は建築家として理事に加わり、企画運営に当たるとともに、会場構成のデザイン、アート計画、アート制作を行った。会場構成にあっては福島県文化センターの既設パーティションをアート展示に使用するという条件で会場をデザインせざるを得なかった点で、従来は直線的にのみレイアウト可能なシステムを用いて立体的かつ複合的な会場構成を試みた。また、単調になりがちな大規模展覧会場にあって動きを作り出す装置として地域材を用いた不変則なベンチなどを動線上に配し、会場の休息スペースをつくと同時に展覧会場を回遊する誘引装置となるよう試みた。

本旨では福島県における地域主体による国際展の企画運営におけるテーマ性と会場構成を行う上での既設システムの応用、アート展示計画、アート制作についての取り組みと新たな試み、その成果について論じる。

はじめに

2006年9月27日から10月9日の2週間に及び開催された「福島現代美術ビエンナーレ2006」は今回で2回目となる展覧会であるが、ビエンナーレがもともと2年に1度の国際的なアート展であるという意味では今回が初めてということが出来るだろう。2004年に開催された第1回目の福島現代美術ビエンナーレは、福島大学の絵画教室を母体として、その在校生、卒業生を主体して行われた展覧会であり、同窓会的、同人会的展覧会であったと言える。

ビエンナーレが共通テーマを持つということは今まではあまり例がない。どちらかと言えば、時代のもつテーマ、運営主体が備えている質のようなものはあったかも知れない。ベネチアビエンナーレはその時々を代表するアートや建築が顔を揃えるし、2005年に行われた横浜トリエンナーレはキュレーターを入れずにアーティスト自身が企画運営を行ったということではそれも時代の要請だったかも知れない。

「福島現代美術ビエンナーレ2006」は地域性を出すためにテーマを設定することになった。福島に由来するテーマ、「空」がそれである。これは高村光太郎の妻、智恵子の言葉から引用した。

「智恵子は東京に空が無いと言ふ。ほんとの空がみたいと言ふ。(省略)阿多多羅山の山の上に毎日出てゐる青い空が智恵子のほんとの空だといふ。」(高村光太郎作 あどけない話より)

福島の「ほんとの空」を皮切りに、繋がる空、ひとつの空をテーマとし、海外のアーティストにも空に関連する作品を集うこととした。

結果、国内外の作家150人程の作品が寄せられ、分野も平面作品に限らず、立体、インスタレーション、映像、舞踏、パフォーマンス等々の作品が集まった。筆者は企画運営から携わったが、専門分野としてはこれらの多様な作品群のアート展示計画と自らも出展依頼があったため、展示を観る人々の休憩スペースとなるベンチのデザイン・制作を福島県白河郡にある矢祭町の大工職人たちと行い展示している。

1. 展覧会概要

名 称 福島現代美術ビエンナーレ2006

会 場 福島県福島市春日町 福島県文化センター

会 期 2006年9月27日～10月9日

企画主催 福島現代美術ビエンナーレ実行委員会、国立大学法人福島大学、財団法人福島県文化振興事業団

共 催 福島県、福島県教育委員会

特別協賛 福島民報社/協 賛(株)エスケーコーポレーション

後 援 福島市、福島市教育委員会、福島県芸術団体連合会、財団法人福島県国際交流協会、
NHK福島放送局、テレビユー福島

助 成 福島大学キャンパスライフ活性化事業、福島大学学術振興基金

協 力 (株)クサカベ、日本画材工業(株)、三桜社画廊、おおつき画廊、こむこむ、飯野町 UFO
ふれあい館、霊山こどもの村、(株)ピクセン、POLA、東京電機大学、NPO アート農園、
MMAC、福島市写真美術館

会場構成 柴崎恭秀+SOFT UNION

開催テーマ 「福島に関連したテーマ」

「若手作家と現代美術の紹介」

「地域の方々との作品交流」

運営委員 会 長 渡邊晃一(福島大学人間文化発達学類助教授)

代表理事 高城俊春(福島県文化振興事業団)

理 事 神山俊一(CCGA 現代グラフィックアートセンター学芸員)

川延安直(福島県立博物館学芸員)

熊田喜宣(福島大学デザイン学科教授)

佐々木吉晴(いわき市立美術館学芸員)

柴崎恭秀(会津大学短期大学部助教授)

杉原聡(郡山市立美術館学芸員)

鈴木美樹(福島学院大学短期大学部講師)

橋本淳也(福島県立美術館学芸員)

星野共二(福島大学共生システム理工学類教授・MMAC 代表)

招待作家 靄嘸・芝章文・山中現・Air Plug(井上尚子+柴山拓郎)・杉本博司・山ノ井聖枝・

吾子可苗・菅野友代・油井ひろ子・浅井綾子・鈴木淳史・弓田章代・阿部洌・鈴木美樹・

横堀美香・荒井経・諏訪敦・吉江庄蔵・新井知生・高橋良子・吉田重信・荒木久美子・

高橋加寿子・与那覇大智・荒洋・滝澤水瑠・和合亮一・井坂健一郎・醍醐イサム・

渡辺晃一・石川貞治・丹野真弓・MMAC・石川進・土田恭子・Aki Wendland・國島篤・

星久美子・Nagarbasi Barman・久保賢一・ほすみまさふみ・Oezlem Guenyol・熊田喜宣・

松本綾野・Ole Cla en・輿水紫石・松本良子・Rajat Sen・小林浩・三浦優紀・

Ricard Atl Laguna Ramirez・齋藤隆・南原絵理・Raphael Gosieniecki・齋藤千明・

美濃谷学・Sheri Simons・佐垣慶多・宗像利浩・Susana CastellanosAlbores・

作田美智子・茂木拓・Tomasz Wendland・佐治真理子・森真奈美・Zero-Reiko Ishihara・

佐瀬智美・山内美奈・Eun-Kyung Choi・佐藤美知子・山我敏・Soo-Nim Kim・篠木美恵子・
山田ちさと・王芳・柴崎恭秀・山寺有里子・朴吉子・李玉興 他



【主会場となった福島県文化センター】



【テーマ「空」を表したサイン計画】

2. アート展示計画について

福島現代美術ビエンナーレ 2006 の主会場となった福島県文化センターは、昭和 45 年に開館した地下 1 階、地上 3 階の鉄筋コンクリート造の建物であり、大きくは展示スペースと大小のコンサートホールで構成されている。ビエンナーレの展示には 3 階の展示室が用いられた。約 43m × 24m の長方形をした展示室が 2 つに分割されている。通常はここに 450 組の幅 1800mm × 高さ 2950mm のアルミフレーム有孔ボードを床の固定穴に差し込んで直線的にレイアウトしている。



【県展などで使用する場合の展示パネルレイアウト】

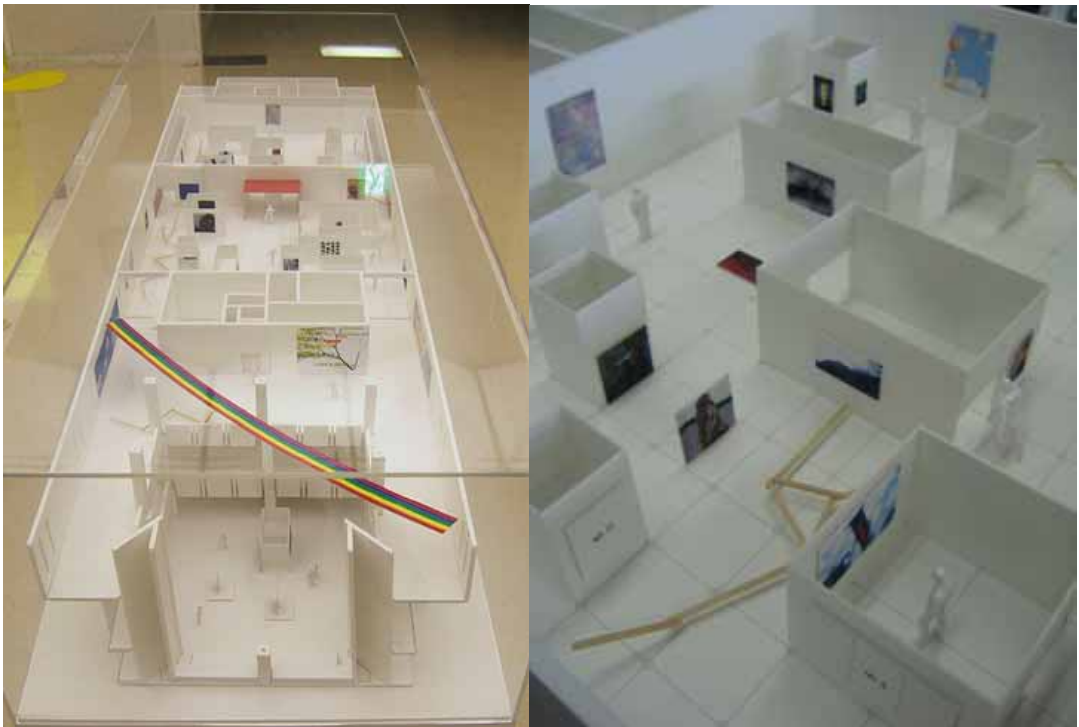


【既存展示パネルでボックスをつくるレイアウト】

2年前に行われたビエンナーレでも同様に直線とコの字型のレイアウトを行った展示であったが規則的で堅い印象があった。この反省からビエンナーレに相応しい展示空間の構成デザインを建築家に依頼することになり筆者がデザインすることになった。しかし、予算上使用できる展示パネルはこの既存のものしかないため、限られた条件でのデザイン検討となった。

ビエンナーレの展示で重要な点は、様々な作家の作品と会場を訪れる地域の人々が一体になって展示会をつくっているという雰囲気をもたせるところであると考え。公募展や日展などのように予め作品を限定することはしない。特に今回のビエンナーレでは多くの若手に参加してもらう主旨で学生の作品を多く展示する。作品のジャンル、サイズ、それと端的に言ってしまえば見栄えについても様々であり、これをひとつの会場にレイアウトしていくという難しさがある。言い換えればこれがビエンナーレの醍醐味でもあり、お祭りのような賑やかで自由な雰囲気をつくる必要がある。

したがって、直線的で一端展示パネルの前に立つと視線が切られて他所の様子が分からなくなるような通常の展示方法は避け、既設の展示パネルを箱状に組み合わせて、約1,000㎡のフリースペースをつくり、そこに大小様々な展示ボックスを置くことにした。この展示ボックスは内側にも入れるように下部の展示パネルを外すなど、さらなるバリエーションを加えた。大きなボックスの中に小さなボックスを置くようなスペースも試みている。



【模型による会場全体のレイアウト】

これにより一端規則性を無くしながら、展示会場の全体をみせる構成を施し、ボックスの内部に展示場所をつくることで、小品や光を嫌う映像作品、また、周囲との関係性を嫌う作品を(ピエンナーレの展示構成でもうひとつ難しい点は、隣り合う作品どうしが影響し合う場合で、サイズや色、作品性など組み合わせが上手くいかないケースが多々ある)この中に収めていくという方法を探ることができる。壁量が不足することも懸念されたが、表面積の考え方言えば実は効率を上げる展示方法でもあるため、心配された不足については殆ど問題にはならなかった。

搬入の際は予め計画していた展示場所に作品が収まらない状況もしばしば見受けられた。ひとつには作家自身が場所を主張する場合であり、展示ボックスのパネルを外したり増やしたり、或いはスペースを独占する作家も現れたが、ひとつが狂うと全てに影響が及ぶという展示方法ではないため、この状況でも柔軟に対応することができた。



【既存の展示パネルを用いてボックスを構成】

3. アート展示制作の経緯

筆者は今回のビエンナーレでは理事、会場デザインその他、招待作家としてアート出展依頼もあり、会場デザインと関連したアートを制作・展示することになった。

会場デザインは前述のような自由度の高い展示手法を取り入れたが、会場の一辺が約43mという長さのため、会場を訪れた人々はかなりの距離を歩くことになる。一方会場には休憩場所やソファ類は僅かで休憩スペースが不足した状態であった。そのため、ここに人々を作品から作品へと誘導する軟らかなオブジェを兼ねたベンチを作品として提案することにした。

ベンチのデザインに際しては今回のビエンナーレの主旨に合わせて地域材料を用いることとし、大量供給が可能で安価、そして何よりも地域材の使い方の新しい提案になることを目的として候補を探した。その結果、福島県白川郡矢祭町で大量に出ているという間伐材の柱のアウトレットにアプローチすることになった。

矢祭町には国内の杉間伐材を集め柱に製材した後に日本中に出荷している材木会社がある。ハウスメーカーや建売住宅の柱材として使用している材であるが、近年のシェアは伸びつつあり会社も成長の一途であるということだった。ところが強度測定を行って基準値に満たない柱材が月量にして1,000本程出しており、再利用や処分には相当のコストがかかる点で再利用方法を模索している状況にあった。これを今回のベンチ制作に使用することにした。



【矢祭町でのベンチ試作風景】

4. 「星ノ座」のデザインと制作について

間伐材の再利用と地域材のアピールを目的にベンチのデザインを進めるなかで、材木関係者、地域の木工職人らの協力を得ることが出来、材料も安価で譲り受けることになった。

ベンチはこの材料を極力加工せずに誰にでも簡単に組み立てることができるようにして、今後このような間伐材の再利用の話が持ち上がったときに、誰にでも活用できる簡単なシステムをつくることをデザインの目標とした。矢祭町で調達した約 50 本の長さ 3m×120mm 角の材を、それぞれ 3m, 2m, 1.5 m, 1m の材に必要な数カットし、これの端部に穴を開け上下の重なりで連続的にボルト・ジョイントする。これにやはり廃材である仮設足場鋼管をカットしたものを取付けて脚とするが、直線上に並べると転倒モーメントが働き自立しない。ところが僅かにくの字型にするだけでこの転倒モーメントは軽減し自立性が高まることが計算上で確かめられた。

この原理を利用し角材を星座の形に構成して(福島県の特に阿武隈エリアは国内有数の星の観測ポイントでもあることからデザインモチーフとして星座を選んだ)ベンチをつくることにした。制作は矢祭町の木工職人らの協力を得て、試作で強度を確かめた後に全ての制作を行った。部材の梱包方法や会場での組み立ての効率も考慮してシステム化を図った。結局、合計 8 つのベンチを製作、総計すると長さでおよそ 150m におよぶベンチになった。会場でのセッティングでは実際のアートの配置が計画通りにならないところが数多くあったが、ジョイントで星座の形体を多少調整すれば会場に容易にセッティングすることができたため、その点で自由度の高いベンチになったと言える。

ベンチには星座に因んで「星ノ座」という作品名を当てた。「空」がテーマである今回のビエンナーレの作品群のなかで、なるべく分かりやすく一般の人々や子供たちに利用されることを考慮している。展示の利用状況をみるとやはり子供たち、子供連れの親子、老人の利用が多いようである。



【屋外に展示された「星ノ座」】



【立体作品の間に置かれ観賞と休息のスペースとなる】



【来館者が集う風景】

5. 結び - 地域主体の国際展の意義と今後

地域主体の国際展は、最近では新潟県松之山で行われている越後妻有トリエンナーレや横浜トリエンナーレが有名である。新潟では予算は経済効果があることから地方自治体が負担し、横浜についても同様である。新潟ではアートキュレーターが海外の著名な作家を誘致しているのに対して、横浜では以前はそうであったものを新たな試みとしてアーティスト自身がキュレーターの代わりをするという手法で新しい地域型のアートイベントを試みている。福島県で行われた今回のピエンナーレは、予算は僅かカタログやパンフレットを制作するので精一杯の状況、作家の出展も含め殆どの部分はボランティアが主体となって行われているのが現状である。

今回のピエンナーレでの集客数、動員数は未だ集計が終わっていないが、前者と比較すればかなり少ない数字となると予測できる。集客数が伸びればそれに応じて地域での経済効果も見込まれ、比例して寄付や協賛企業の数も増えると考えられるが、ボランティアに多くを頼っている現状ではなかなか次のステージに上がるのが難しい。反面、誰でも気軽にイベントに参加できるのも事実である。

地域主体の国際展を運営する上ではこのバランスが重要であろう。今後は根強く地元企業や個人の参加協力を求め、また、諸団体の助成を積極的に受けていく必要がある。さらには地方自治体の理解と参加が最も重要であると考えられる。ある程度の費用を地方自治体が負担することで、例えばそれで出展作品を買い上げて公共の場に置く、それがストックされて他地域からの経済効果があるなどの循環的な取り組みがされれば、例え規模の小さな国際展であっても根付いていくと考えられる。ビジネスを先行させずに丁度いい規模で地域にアート展とアートを根付かせる手法が大切であるだろう。



【虹の作家・巖嘔氏と作品展示の打合せ風景】



【立体オブジェの展示風景】



【舞踏家による作品とのコラボレーション風景】



【海外からの出展作品-床展示風景】



【子供たちによる「空」のワークショップ風景】